

桑野塾

桑野塾 検索

教える、教えられるという関係ではなく、さまざまな人たちが出会い、思いや考えを交錯させ、刺激し合う場として不定期で開催している会です。毎回ジャンルを横断するさまざまなテーマで発表をしています。テーマに関心のあるかたでしたら、どなたでも気楽にご参加いただけます。

第15回

2012年 11月17日(土)
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 早稲田キャンパス16号館 820号室

★ どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。参加無料。

☆ 終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(飲食費は別途)

※予約の都合上、懇親会参加をご希望の方はなるべく事前にご連絡いただくと助かります。

※報告者・タイトルは変更の可能性もあります。ご了承ください。



テーマ: ロシア・バレエ—アジアとの出会い

ウダイ・シャンカールとアンナ・パヴロワ

報告者: 平野 恵美子



ウダイ・シャンカール

インド舞踊がヨーロッパに与えた衝撃

著名なシタール奏者ラヴィ・シャンカールの長兄であるウダイ・シャンカールは、今世紀初頭、アンナ・パヴロワと共演することなどにより、インド古典舞踊の復興とその欧米での認知に大きな役割を果たした。

20世紀初頭ヨーロッパにおいて、シャンカールやパヴロワらを媒体とし、日本やインドの東洋舞踊がどのように受容されたかということについて考察する。

*アンナ・パヴロワ: 有名なバレエ・リュスの元花形バレリーナ。後に自身のバレエ団を結成し、世界中で公演。世界的な名声を得た。



アンナ・パヴロワ
1923年ロンドン公演プログラムより

日本人の眼に映ったバレエ・リュス

報告者: 沼辺 信一



バレエ・リュス《シェエラザード》(1910初演)より

左・杉浦非水・画「王妃ゾペイダ」(1912)
右・長谷川潔・画「金の奴隷」(1913)



百年前のパリに咲いた華——

今年(2012年)は日本人がディアギレフのバレエ・リュスと遭遇してから百年という記念すべき年にあたっています。

1912年6月、洋行中の画家・石井柏亭はパリでニジンスキーの妙技を目のあたりにし、日記にその感想を的確に書き綴りました。これを嚆矢として、たまたまパリ、ロンドン、ベルリンに滞在した大正初年の若き芸術家たちは、少なからぬ貴重な鑑賞記録を残しています。また、留学は叶わなかった者たちも、さまざまなルートから日本に伝わったバレエ・リュスの最新情報に胸ときめかせました。

彼らがどのような経緯からバレエ・リュスと出逢い、そこから何を学び、体得したかを考えてみます。



「金の奴隷」に扮したニジンスキー(1910)